様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０６９

研究課題名（和文）新出土文献による中国古代思想史の再構築―楚国故事を中心に―

研究課題名（英文）Rewriting Ancient Chinese Intellectual History--relying mainly on unearthed texts of Chu stories

研究代表者
草野　友子（KUSANO, Tomoko）

京都産業大学・文化学部・講師

研究者番号：９０７３３４０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、新出土文献を用いて中国古代思想史を再構築するものである。具体的には、上海博物館が所蔵する戦国時代の竹簡（上博楚簡）に含まれている春秋戦国時代の南方地域「楚」の国の故事（楚国故事）を研究対象とし、その内容と思想的特色を解明した。その結果、楚国故事は、楚の太子や王族貴族を対象とした教訓書である可能性を指摘した。研究の過程では、中国の博物館や研究機関に赴いて竹簡の実見調査や現地研究者との学術交流を行った。また、研究成果は国内外の学会・研究会や研究誌等において発表した。

研究成果の概要（英文）：This study is trying to rewrite the ancient Chinese intellectual history with the newly unearthed literature. Specifically speaking, to focus on the stories about the south state Chu during the Spring and Autumn States period and Warring States period, which have been written on the bamboo strips cached in Shanghai Museum, in order to probe their contents and characteristics as ideological texts. It is quite possible that these stories were collected as sermons for princes or other royalty of the Chu state. In order to investigate the bamboo strips thoroughly and communicate with the editors and other scholars, I have visited some museums and research institutions in China several times, and presented my papers at academic conferences and in journals both domestic and overseas.

研究分野：中国哲学

キーワード：中国古代思想史　新出土文献　上博楚簡　楚国故事　中国

１．研究開始当初の背景

20 世紀後半以降、中国各地で中国古代思想史の空白を埋める竹簡資料が相次いで発見されている。特に劇的な事態をもたらしたのは、1993～1994 年に発見された郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）・上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）、2008 年に発見された清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）などのいわゆる「新出土文献」である。これらは戦国時代中期に書写された竹簡であり、経書、史書、諸子百家に関わる文献や、春秋戦国時代の各国の故事など多様な内容が含まれている。新出土文献は世界的に注目されており、各国で盛んに国際学会が開催され、学術雑誌や研究機関のウェブサイトに次々と研究論文が発表されている。

筆者はこれまで、〈伝世文献に新出土文献を加えた総合的考察〉という手法を用いて研究を進めてきた。その主な対象は 2001 年に公開が開始した上博楚簡であり、『魯邦大旱』『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』『姑成家父』といった春秋時代の魯・斉・晋に関わる文献や、『申公臣霊王』『命』『成王為城濮之行』などの楚国故事を取り上げ、釈読の提示や内容の分析を行ってきた。また、2011 年 11 月から１年間、出土文献専門の研究機関、武漢大学簡帛研究中心において在外研究を行ったことを契機に、多くの海外研究者と交流し、国際学会での口頭発表や国外の学術誌での論文掲載など、国際的な水準で研究活動を行ってきた。さらに、2008 年から毎年、中国出土文献研究会（代表：湯浅邦弘教授・大阪大学）の学術調査に参加し、上海博物館や清華大学・北京大学などに赴いて竹簡の実見調査を行っている。

このように研究を遂行する中で、楚国故事の多様性が明らかとなってきた。楚国故事には歴代の楚王や臣下が登場するが、伝世文献には見られない内容や、類似した話でありながら結末が異なるものなどが含まれている。先行研究において、楚国故事は楚の太子や王族貴族の教育用に書かれた教戒書であるとの見解が提示されている。ただし、たとえば『命』は、楚王は登場せずに臣下同士の会話のみで成り立っており、また『成王為城濮之行』は、楚王とその臣下が登場するものの、王や臣下の規範が明確に示されているわけではない。そのため、楚国故事の性質や成立の目的などについて改めて検討する必要があるとの考えに至ったのである。

２．研究の目的

本研究は、中国の新出土文献を用いて中国古代思想史を再構築するものである。上海博物館が所蔵する戦国時代の竹簡「上博楚簡」には春秋戦国時代の南方地域「楚」の国の故事（楚国故事）が多数含まれており、伝世文献には見られない内容も含まれている。そこで、本研究は、

(1)最新の古文字学研究の成果を取り入れつつテキストを確定し、

(2)関連する伝世文献や出土文献と比較しながら研究し、中国古代思想史を再構築する。

(1)については、新出土文献は秦の始皇帝が文字を統一する前に使用されていた文字で記されており、難読箇所が多く存在するため、古文字学的検討を行ってテキストの確定作業を行う。

(2)については、楚国故事に見える国家の運営や王権の存続といった政治思想に関わる問題を中心に考察する。特に、上博楚簡第九分冊所収の楚国故事『邦人不称』『陳公治兵』を主な研究対象とし、『春秋左氏伝』『国語』『史記』などの伝世文献や関連する他の出土文献との比較を通して、楚地域における思想的特色を解明する。

３．研究の方法

(1)研究方法

新出土文献を研究するにあたって基礎的かつ重要な作業は、テキストの確定である。現在公開されている戦国時代の竹簡は戦国古文字で記されているため、難読箇所が多数存在し、その解読には古文字学の方面からの検討が必須となる。また、竹簡が誤って排列されているものもあり、排列を検討して確定する必要がある。そこでまず、各文献の竹簡排列と文字認定の問題を解決し、テキストを確定して、訳注（釈文・訓読・日本語訳・語注）を作成する。

テキストを確定した後、内容の検討に入る。楚国故事の内容は、主に国家の運営や王権の存続などの政治思想に関わるものであり、これまで十分にはわからなかった楚地域の思想を窺い知ることができる。このような文献は、どのような意図のもと、どのような人物を対象として著作されたものなのか。また、そこに見える思想は、中国古代思想史の中心とされてきた「中原」と、どのような点が共通し、どのような点が異なるのか。これらの問題について、『春秋左氏伝』『国語』『史記』などの伝世文献や、楚国故事と関連の深い他の出土文献と比較し、その思想的特質を明らかにする。楚国故事を総合的に検討することができれば、春秋戦国時代の楚の思想的状況や思想史上の位置づけが明らかになり、中国古代思想史の再構築につながると考えられる。

(2)実見調査と学術交流

新出土文献には、難読文字や竹簡の写真図では判読しがたい文字などが多々あるが、実見調査を行うことにより、文字を確定するための大きな手がかりが得られる。また、現地研究者との学術交流を行うことで、竹簡の詳細や今後の公開状況などの最新情報を入手することができる。さらに、研究成果を国内外で随時発表し、専門家と意見交換を行うことにより、研究の精度を高めることができる。

４．研究成果

(1)主な研究成果

研究期間中は、上博楚簡『邦人不称』、上博楚簡『陳公治兵』、清華簡『封許之命』の三篇を中心に研究を進めた。

『邦人不称』は、春秋時代の楚の賢臣、葉公子高（沈諸梁）に関する故事である。まず、竹簡の排列・綴合・帰属の問題を検討した上で本篇全体の釈読を提示した。続いて、本篇のキーワードである「不称」を手がかりに、本篇の全体構成と性質を明らかにした。その結果、本篇では葉公子高が高く評価されていることや、本篇も楚の太子や王族貴族を対象とした教訓書の一種である可能性を指摘した。

上博楚簡『陳公治兵』は、楚の戦争の状況や軍隊の配置、敵軍の追撃を防ぐ方法などが記されている文献である。その内容は伝世文献には見られず、楚の軍事の実態が窺える資料である。ただし、本篇の竹簡排列には問題があり、難読箇所も多く存在する。そこで、竹簡の排列案を検討して本篇の復原を試み、本篇の内容について検討を加えた。その結果、全体をおおまかに分類すると、楚の先王・先君の戦歴、楚王と陳公との対話、具体的な兵法の三つに分類できることが明らかとなった。また、本篇全体を総合して排列することはできず、全てが『陳公治兵』の竹簡であるかどうかは疑わしいことを指摘した。

清華簡『封許之命』は、2015 年 4 月に新たに公開された清華簡の第五分冊の一篇である。本篇は、周初の許国封建に関する文献であり、周王が呂丁に寄贈した車馬や器物などが詳細に記載されている。まずは研究の初歩段階として文献解題を執筆した。今後はさらに、西周金文などの関連資料と比較しながら研究を進める予定である。

このほか、共著『テーマで読み解く中国の文化』では、「故事と歴史」と「年中行事」を担当した。「故事と歴史」では、新出土文献の最新の研究成果を踏まえながら、一般読者に向けて、中国における故事集と歴史書について概説した。

(2)実見調査と学術交流

2014 年 9 月には甘粛省に学術調査に赴き、秦代・漢代の簡牘資料（いわゆる西北簡）の実見調査を行った。その際、簡牘の整理・保存の状況や西北簡の性質などについて現地研究者と会談することができた。また、2015 年 9 月には、北京大学・清華大学を訪問し、北京大学が所蔵する漢代の竹簡と秦代の簡牘（北大漢簡・北大秦簡）および清華大学が所蔵する戦国竹簡（清華簡）の実見調査と、現地研究者との会談を行った。実際に竹簡の整理にあたっている研究者と具体的な内容について討論することができ、非常に有益であった。

さらに、「漢學」國際學術研討會（於台湾）、東アジア文化交渉学会、中国出土資料学会、漢字学研究会、「出土資料と漢字文化研究会」主催シンポジウムなどの学会・研究会に参加し、新出土文献の専門家と学術交流を行うことができた。特に、2015 年 5 月に参加した東アジア文化交渉学会第 7 回国際学術大会においては、筆者を含む若手研究者六名がセッションを組んで研究発表し、意見交換を行った。司会・コメンテーターは、出土文献研究の専門家である谷中信一教授（日本女子大学）・大西克也教授（東京大学）に務めていただいた。関東・関西をそれぞれ研究拠点としている若手研究者が一同に介した貴重な機会となった。また、筆者が所属する中国出土文献研究会は定期的に研究会合を行っており、研究期間中にも研究成果を随時発表し、研究の問題点、解決すべき点などについて意見交換を行うことができた。

このほか、2015 年 11 月には、徐少華教授（武漢大学）による楚の遠祖とその関連地域についての研究発表（於大阪大学）の通訳を務め、当該論文の日本語翻訳版を『中国研究集刊』に投稿し、掲載が確定した。この論文で取り上げられている清華簡『楚居』は、楚の歴代君主の所在や国都の変遷を記した文献であり、楚の歴史を知る上で重要な史料である。楚の淵源を探る徐氏の研究論文を翻訳したことは、筆者自身の研究にとっても有益なものとなった。

(3)本研究の位置づけと今後の展望

以上の研究成果から、現段階では、上博楚簡の楚国故事の性質を以下のように結論づけている。楚国故事は、楚王の側に何らかの過失・失敗があり、王の規範や禁忌などが示されるというものが多い一方、臣下同士の対話を中心に構成され、王を補佐すべき立場としての規範が示されているものもある。これらは楚の太子や王族貴族の子弟を対象として教戒をまとめた故事集であり、教訓書としての役割をもった文献であると推測される。これまで教訓書といえば、前漢の劉向が編纂した『新序』『説苑』『列女伝』がその代表的書物であったが、戦国時代にはすでに教訓書として意識的に編纂された故事集が存在していたのである。

研究期間中、想定外であったことは、上博楚簡の続巻が公開されなかったことである。そのため、上博楚簡の楚国故事全篇を検討し、研究を総括することはできなかった。しかし、その一方で、清華簡の続巻や北大漢簡などの新資料が続々と公開された。その中で、「故事」というものを今一度見直すべきではないかと考えるようになった。たとえば、清華簡には殷の伊尹に関する故事、北大漢簡には周の訓誡に関わる書『周馴（訓）』など、注目すべき文献が含まれている。また、北大秦簡には女戒に関わる文献が含まれているとのことである。これらはいずれも伝世文献には見られない内容を含んでおり、故事の多様性を示すものとなっている。

以上のことから、今後は、戦国竹簡・秦簡・漢簡に見える「故事」類文献を総合的に検討し、伝世文献との比較を通して、その変遷と展開を明らかにしていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①徐少華著、草野友子訳、「楚の遠祖陸終とその妻女●（女＋貴）の伝説に関する一考察――清華簡『楚居』を手がかりとして」、『中国研究集刊』、査読有、第 62 号、2016、掲載決定（印刷中）

②中国出土文献研究会（湯浅邦弘、清水洋子、福田哲之、草野友子、中村未来、福田一也、竹田健二）、「清華簡（五）所収文献解題」、『中国研究集刊』、査読有、第 61 号、2015、58-91

③湯浅邦弘、草野友子、「秦簡牘の全容に迫る――陳偉主編『秦簡牘合集』」、『中国研究集刊』、査読有、第 61 号、2015、100-108

④草野友子、「上博楚簡『邦人不称』の全体構成―「不称」を手がかりとして―」、『日本秦漢史研究』、査読有、第 16 号、2015、90-113

⑤草野友子、「上博楚簡『陳公治兵』の基礎的検討」、『中国研究集刊』、査読有、第 60 号、2015、35-52

⑥中国出土文献研究会（湯浅邦弘、中村未来、福田一也、草野友子）、「甘粛省出土簡牘調査報告」、『中国研究集刊』、査読有、第 59 号、2014、138-158

⑦草野友子、「上博楚簡《邦人不稱》的“不稱”」、『2014 年國立高雄餐旅大學應用日語系「觀光、言語、文學」國際學術研討會論文集』、査読有、2014、53-65

〔学会発表〕（計５件）
①草野友子、「清華簡『封許之命』解題」、中国出土文献研究会第 59 回研究会、2015 年 9 月 22 日、大阪大学文学部中国哲学資料室（大阪府豊中市）

②草野友子、「清華簡『封許之命』釈読」、中国出土文献研究会第 57 回研究会、2015 年 7 月 4 日、大阪大学文学部中国哲学資料室（大阪府豊中市）

③草野友子、「上博楚簡『陳公治兵』の文献的性格」、東アジア文化交渉学会第 7 回国際学術大会、2015 年 5 月 9 日、開成町福祉会館（神奈川県足柄上郡開成町）

④草野友子、「上博楚簡『陳公治兵』の基礎的検討」、「漢學」國際學術研討會、2015 年 3 月 7 日、致理技術學院、台湾（台北市）

⑤草野友子、「上博楚簡『邦人不称』の全体構成―「不称」を手がかりとして―」、中国出土文献研究会第 56 回研究会、2014 年 12 月 27 日、大阪大学文学部中国哲学資料室（大阪府豊中市）

〔図書〕（計１件）
①湯浅邦弘、宮本一夫、横田恭三、中村未来、草野友子、他 15 名（11 番目）、ミネルヴァ書房、『テーマで読み解く中国の文化』（第 8 章「故事と歴史」、コラム 8「年中行事」）、2016、430（191-214、272-277）

〔その他〕
ホームページ等
中国出土文献研究会ホームページ
http://www.shutudo.org/

６．研究組織
(1)研究代表者
草野　友子（KUSANO, Tomoko）
京都産業大学・文化学部・講師
研究者番号：９０７３３４０２